

日本の鉄砲伝来

(日本科学史の一側面)

文 道 平

はじめに

16世紀半ば日本の西欧科学技術との接触は、鉄砲伝来による製作技術の導入に始まった。その鉄砲は戦国時代の真只中に入ってきた。日本はこの鉄砲の威力によって割拠から統一へと大きく転換し、戦法も著しく変った。戦国の武将織田信長からその権力を継承した豊臣秀吉は、全国統一だけではあき足らず、その野望を隣国朝鮮をはじめ中国に目をむけ、全く理不尽な要求をおしつけて侵略し、朝鮮の山河を血に染めた。

この秀吉の侵略歴史の中に、その後の日本のアジア侵略の原型を見ることができる。秀吉はいまも「英雄」として日本人の心の中に生きており、「神」として祀られている。隣国の朝鮮民族には堪えがたい不可解な謎として映っているにちがいない。

〔I〕鉄砲伝来

『鉄砲記』は1543（天文12）年に暴風雨のため種子島へ漂着したポルトガル人アントニオ・ダモア他二名（実は Zeimoto, Pinto, Damota という名前であつたらしい）が、火縄銃を伝え

たときのことを記録したもので、1606年に僧南浦文之^{なんぶんじ}によって書かれたものである。鉄砲伝来の年次については、42年という異説もあるが、1543年とみるのがもっとも確からしい。彼らは、難船した船が修復されるまで、ある金持ちの家に日本渡来初の珍客として迎えられた。家主の案内で無聊を慰めるために鳴打ちに出かけた。このとき使った小銃の噂が島主の種子島時堯^{ときたか}の耳にはいった。時堯の前で Zeimoto が実演してみせると、時堯は当時16歳の若い青年であったが、その小銃が軍事的に決定的な力を備えていることを見てとって、早速二千金という大金を投じてその二挺を買い入れた。

僧南浦文之は、『鉄砲記』にその鉄砲の伝流や威力について次のように記述しているが、その内容の信頼性は高く評価されている。

鉄砲記⁽¹⁾

隅州の南に一つの嶋あり、州を去る事一十八里、名づけて種子という。我が祖世世これに居る。古来相伝う。嶋を種子と名づくるものは、比嶋小と雖もその居民庶^{おれるたみおおく}而して且富めり、譬えば種を播くに一種子を下せば、而も生生窮無きが如し、この故にこれを名づくと。これより先、天文癸卯秋八月二十五日丁酉^{みづのとう ひのととり}に、我西村の小浦に一大船あり、何れの国より来る事を知らず。………その中に大明の儒生一人、五峰と名づくる者

(1) 所荘吉『火縄銃』雄山閣、1993年

あり、……五峰即書していわく、こはこれ西南蛮種の賈胡なり、……偶五峰に遇いて、文字をもって言語を通ず、五峰も亦知己の異邦に在るとおもえり、所謂同声相應じ、同気相求むるものなり、賈胡の長二人あり、一人を牟良叔舎という、一人を喜利志多陀孟太という。手に一物を携う、長さ二三尺、その体たるや、中通じ外直くして、重きを以て質となす。その中は常に通ずと雖えども、その底は密塞を要とす、其の傍に一穴あり、火を通ずるの路なり、形象の比倫すべき物無し。その用うるや、妙薬を其中に入れて、添るに小団鉛を以てす。先一小白を岸畔に置き、親から一物を手にして、その身を修め、その目を眇にして、その一穴より火を放てば、即ちたちどころに中らざることなし。その発するや掣電の光の如く、その鳴や驚雷の轟くが如し。聞者その耳を掩わざることなし。……このもの一たび発って、銀山を摧くべく、鉄壁を穿つべし、姦究の仇を人の国になすもの、これに触れば即ちたちどころに其魄をうしなう。……時堯これを見てもって希世の珍となす。……一日、時堯重訳して、二人の蛮種に謂って曰く、……願わくばこれを学ばんと。蛮種また重訳して答えて曰く、君もしこれを学ばんと欲すれば、我も又その蘊奥をつくしてもってこれを告げんと。……また願わくば学ばんと、時堯その価高くして及び難きを云わず、蛮種の二鉄砲を求めて、もって家珍となす、その妙薬の擣篩、和合の法をば、小臣篠川小四郎をしてこれを学ばしむ。時堯朝に磨き夕べに淬め、勤めて己まず、さきの殆んど庶き者、ここにおいて百発して百中し、一を失うものなし。この時において紀州根来寺に杉坊某公なるものあり、千里を遠しとせず、わが鉄砲を求めんと欲す。時堯人のこれを求めるの深きに感ずるにや、……すわなち津田監物丞を遣りて、持してもってそ

の一つを杉坊に贈りぬ、かつ、これをして妙薬の法と、火を放つ道とを知らしむ。時堯把玩の余、鉄匠数人をして、その形象を熟視せしむ、月鍛季練して、新にこれを製せんと欲す、その形制頗るこれに似たりと雖えども、その底のこれを塞ぐゆえんを知らず。その翌年、蛮種の賈胡またわが嶋能野の一浦に来る。浦を能野と名づくるは、また小廬山・小天竺の比なり。賈胡の中に、幸いに一人の鉄匠あり、時堯もって天の授るところとなす、即ち金兵衛尉清定なるものをして、其底を塞ぐところ学ばしむ。漸く時月を経て、其巻いてこれを蔵むることを知る。ここにおいて歳余にして新に数十の鉄砲を製す、……ここにおいてか、家臣の遐迹にあるも、視てこれに倣い、百発百中するもの、またそのいくばく多きを知らず。その後和泉の界に橘屋又三郎というものあり、商客の徒なり、わが嶋に寓止すること一二年にして、鉄砲を学ぶこと殆んど熟す、帰施の後、人皆名をいわずして呼んで鉄砲又という、然して後畿内の近邦、皆伝えてこれを習う。ただ畿内・関西の得てこれを学ぶのみに非ず、関東も亦然り。……さきの蛮種の二鉄砲、わが時堯これを求めてこれを学び、一たび発して扶桑六十州を聳動す。かつまた鉄匠をしてこれを製するの道を知りて、五畿七道に徧からしむ。しからばすなわち鉄砲のわが種子嶋に権輿するや明らかなり、むかし一種子の生々窮りなきの義を採って、わが嶋に名づくるものは、今もってその識に符となす。古に曰く、先徳善あって、世に昭々たること能わざるものは、後世の過ちなりと、因これを書す。

(1) 鉄砲製造法の導入

武器としての鉄砲のすぐれた性能を、Zeimotoの実演によって知った時堯は、家臣篠川小四郎に火薬の製法を、領内の優秀な刀鍛冶

の八板金兵衛に鉄砲製造法をそれぞれ分担研究させた。もちろん購入した二挺の鉄砲を手本にした研究である。

『鉄砲記』に、「篠川小四郎をして妙薬の製法を学ばしむ」とあるのをみると、篠川はポルトガル人の持っている不可解な粒子（硝石）に、硫黄と木炭を混和すると、爆薬ができること程度の予備知識はもっていたにちがいないが、その三種の原料の混合方法はまったく新しいものであり、どうしてもそれを学ぶ必要があったと考えられる。ところが、その中の木炭はどこにもあるし、硫黄も国内に良質なものが産出しているが、硝石の天然鉱床は日本にはない。そこで硝石だけは南蛮貿易によって、唐船、ポルトガル船により、中国山東省産の硝石（土硝ともいう）あるいはインドの硝石を持ちこんだのであろう。

戦乱のころになると爆薬は大量に消耗されるので、いつまでも輸入にたよるわけにもいかない。そこで、硝石の輸入とともに国産ということを考えていくのである。

最初のころの人工的な硝石の作り方は、土硝といって、便所、馬小屋などの床下からかき集めた土には、多量の硝石が含まれているため、これを水に溶かし、灰汁を加え、上ずみを取って煮つめると、純度はわるいが、硝石が得られるのである。しかし、このような作業は、能力が悪く不潔なために、耕地の少ない谷間の村において、米に代わる年貢として納めるために、生産されていたようである。

飛騨高地の奥地の秘境・越中五箇山ごかやまは、江戸時代全期を通じて、加賀前田藩の硝石製造を受持っていた。菅沼部落の民俗館には、当時硝石製法に使われた原塩溶解槽、煮込釜、御灰入な

どの道具類や、これで作った焰硝の見本などが保存されている。

一方銃身の製法技術を担当した八板金兵衛は、島主時堯が購入した鉄砲の見本はあるものの製法技術は別である。彼らにその製法を懇請したが、言を左右にしていっこうに教えてくれない。船の修復は着々と進んで、種子島出帆の日は間近い。金兵衛の気はあせるばかりである。意を決した彼は十七歳になる自分の美しい娘若狭に因果を含めて船長のもとに行かせ、一夜の契りを結ばせる⁽²⁾。船長が製法を知っていたのか、船長が他のポルトガル人へ取り持ちを依頼したかはさだかでないが、この若狭の人身御供は効を奏し、金兵衛は、圧延鉄板を巻くという銃身製造法を修得することができた。

当時の日本の鍛冶技術をもってすれば、鉄砲を作る事はさして困難な技術でないのに、娘まで犠牲にするようなことは考えられないと所莊吉は否定的な見解をのべているが⁽¹⁾、刀鍛冶技術が即鉄砲銃身技術に結びつくとは考えにくいので、恐らく、金兵衛のせっぱ詰った気持ちが察せられるような気がする。このようなことは今日の日韓関係の技術交流においても、ちょっとしたハイテクのノウハウ提供と“キーセン遊び”が日常茶飯事のように行われている位である。

彼らが去ったあと、銃身製造法は、多年日本刀の製作で蓄積した鍛造技術によって消化できたようであるが、ただ一つ銃身端部の尾栓をネジで閉管する方法は、当時の鍛冶匠たちの手に余ったようだ。このことも、翌年たまたま乗り合わせていた異国人によって解決してもらい、宿願を達成した。こうしてそれから一年余りの間に種子島家は数十挺の鉄砲を造ることに成功

(2) 村上陽一郎『日本近代科学の歩み』、1989年

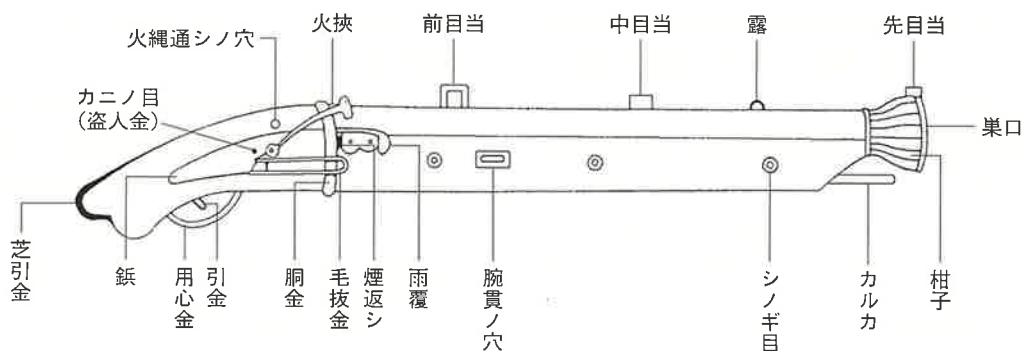


図1 和銃の名称

したのである(図1参照)⁽³⁾。

図1は、ポルトガル人によって伝来された鉄砲を模倣して製作した和銃(火縄銃)であるが、その撃ち方を説明すると、火薬や弾丸は銃口の方から入れるが、通常一発分の黒い黒色火薬を入れる。続いて烏口という弾入れから鉛の弾丸を一発落とす。そして、^{さくじょう}槊杖を抜いて銃腔に差し込み、火薬と弾丸をつきかためる。銃を戻して、火挾を起こし、火蓋を開くと、そこに小さな導火用の穴があいている皿がある。そこへあらかじめ火薬を細かく粉末にしておいた口薬というものを導火用として注ぎ、火蓋の蓋を閉じて、火挾に火がついた火縄の先を口でよく吹いて火先を出してからさむ。

銃把を握って頬にあてがい、目標に向かい、火蓋を切ると、皿が開くから、そこで引き金を引けば火縄の火が導火薬に点火され、続いて発射薬に導かれて爆発をおこして弾丸が発射されるという仕組みになっている。

このような和銃の製作は、1543年(天文12)年に鉄砲(火縄銃)が種子島に伝来すると、ほとんど同時に始められ、以来300余年、明治にいたるまで日本各地で製造されたのである。

(2) 鉄砲の全国的伝播

九州の南端種子島に伝わった鉄砲技術が、なぜかにも比較的短時日の間に、全国的に目を見張るほどの速さで伝播するようになったか、いろいろな憶測があるが、それはあくまでも推定の域を出ない。

時堯は鉄砲の威力に対し、軍事的に決定的な力を備えていることを読み取って、大金を出して購入し、しかも家臣に厳命してその製造法を会得せしめ、取り扱い方法まで熟達させている。このような最新の武器は戦国時代の当時であれば、何よりも貴重なものであり、当然秘匿するはずであるのに、そのようにはならなかった。種子島という位置が、中央に近い戦国大名のように過酷な環境に置かれていなかったためか、あるいは時堯の雅量と、鉄砲技術を広く伝えるべきである使命感がしからしめたのか、いずれにせよ、鉄砲技術は急速に伝播したのである。

歴史的にみれば種子島はその独立時代(島津家との主従関係がなかった室町期あたり)、薩摩の内陸部から文化を吸収するよりも、じかに潮流に乗って上方へゆき、直接、都の文化を吸収していたのではないかという説がある。むし

(3) 所莊吉『図解古銃事典』雄山閣、1993年

る薩摩の内陸部よりも中央文化を受ける濃度が強かったのではないかとさえ思われるふしがある。また時堯の屋敷には、紀州の根来寺の一員津田監物^{けんぶつ}が長期滞留しているし、津田家は大土豪で、根来寺の僧兵の大將あるいは一山の政治経済の切り盛り役もしていた。戦国時代には七十万石ほどの経済力をもっていたともいわれている。

『芝辻文書』の『鉄砲由緒記』には、津田監物は種子島にとどまること十余年とある。滞留しっぱなしということではあるまいが、対明貿易などを通じて、紀州と種子島は十余年間も往来を頻繁にしていたことがわかる。そんなわけでこの津田監物が時堯とは親密な関係にあり、その経済力からして、ポルトガル製の鉄砲を一挺譲り受け、その鉄砲および火薬の製法を取得することは、いとも簡単なことであっただろう。

その後、紀州の根来寺に伝えられた鉄砲に学んだ堺の芝辻清右衛門は、橋屋又三郎（鉄砲又ともいう）とともに、種子島に立寄り、一年余り滞在する間にこの鉄砲のすべてをきわめ、堺に帰ってその製造をはじめた。堺の鉄砲は販路を関西から関東までひろめる。この堺という都市は、十五世紀末から遣明貿易船の発航地として栄えた商都である。この地の商人仲間は近隣領主の勢力争いをうまく利用し、十六世紀半ばころには自由都市のような状態に作り上げていく。そこで堺の商人達は新商品である鉄砲の製造販売拠点とするに絶好の条件をそなえていた。信長、秀吉、家康の三代を通じ、江州国友村とならんで、堺は日本の鉄砲産業の中心地となった。

国友村は姉川や関が原など歴史に残る戦場に近い関係もあってか、刀鍛冶が栄えた。時の将軍義輝は、この国友村の鍛冶たちに、鉄砲一挺を与え、幕府のために鉄砲の製造を命じた。そ

こで、刀鍛冶たちは鉄砲鍛冶に転身するようになるが、「国友鉄砲記」は要次のように記している。

「天文十三年二月将軍義輝は国中から優秀な鉄匠を尋ねたし、鉄砲の製造を行わせるよう管領細川清元に申付けた。清元は命によってこれを尋ね、国友村に国友善兵衛、藤九左衛門、兵衛四郎、助太夫という甚だ名誉の鉄匠四人、そのほか鍛練の者ともあることを知って、これに上意の趣を申し渡した。鉄匠たちはそれまで鉄砲なるものを製作したことがないから、見本を御貸下げ給わらば、それに模して鍛練仕るべしと答えた。義輝は御感あって鉄砲一挺を下げ渡した。鉄匠たちは昼夜肝胆を砕き、これを張練して……天文十三年八月玉目六匁の鉄砲二挺を将軍に献上した。」

「国友鉄砲記」は「1549（天文18年）に信長が六匁玉鉄砲500挺を注文した」と記録している。さらに信長は1570（元亀1）年姉川の戦で朝倉義景を破り、その国友村を領有して、腹心の秀吉に国友村鉄砲業の育成を命じている。

その後、信長の鉄砲戦法で有名な長篠の戦（1575年）においては、3000人余りの鉄砲隊を組織しているが、この戦のときの鉄砲調達も国友村であったことはまちがいない。豊臣政権時代の大阪城夏の陣のあった1615（元和1）年には、国友村に鉄鍛冶が73軒、鉄匠が500人余りいたと記録されている。

このように国友村は、戦国時代の鉄砲の大量生産地として大きな役割を果たしている。信長に続いて秀吉も国友村を直轄料地として、専属鉄砲工場的役割を課したのである。

(3) 戦国時代の戦法転換

鉄砲初伝以来、武器貿易港となった堺と、和製鉄砲の大量生産地国友村との組織的な連携の

もとに、全国の強力な大名の手に鉄砲が渡り、少なくとも1549年には、はやくも銃戦の記録が出はじめている。ことに織田信長は鉄砲を上手に利用して戦国時代の戦法をかえるきっかけを作った名将といわれている。1575（天正3）年の長篠^{ながしの}の戦において、織田軍勢は幾多の戦争経験から、弾丸をこめ代え、次弾を斉射できるまでの時間を見計らい、一陣、二陣、三陣交代で斉射と装弾をくり返す、という連射戦法や、弾丸の射程距離内に馬止めの障害柵を巡らし、武田騎馬隊の突撃を壊滅させ、鉄砲隊の戦争における効果に決定的な評価を与えたのであった。

この戦は戦国最強と謳われた武田騎馬武者が彼らの軽蔑した足軽の打出す鉄砲の前にもろくも敗れ、鉄砲を主とする歩兵戦術が騎馬戦法にまさることが実証され、これを境として、日本の戦争様式が大きく変化したのである。それと同時に、城の造り方、攻め方などにも大きな変化が起こった。旧来の険しい山を利用し、天然の要塞にたてこもる、といった型式の築城法は時代遅れになり、平地または丘陵に石垣・堀、銃眼などを備えた銃戦に即応した城が出現するようになった。近江の安土城、のちの江戸城や大阪城などは、その典型的な城といえることができる。こういった石垣を主体とする堅固な城壁を備えた城に対する攻城法として新しく登場したのが、これまた西欧伝来の大砲であった。

日本では鉄砲の場合と同じように、大砲も中国大陸経過の伝来ではなく、やはりポルトガル船を通じて導入されたものと推定されている。とくにポルトガル船に接するようになった九州諸大名、とりわけ豊後大友宗麟は、大砲の購入に異常なほどの熱意を示し、1568（永禄11）年にはイエズス会に大砲の送付を懇請しているし、1560（永禄3）年に大友は室町將軍足利義輝に大砲を贈っているから、大砲をめぐる交渉は、

かなり早い時期から両者の間で進められていたと推測できる。

大友宗麟が外国から大砲を入手した目的は、イエズス会の宣教師に「予が再び大砲を求むるは予が海岸に住みて敵と境を接し、予が防御の為に之を要すること大なるが為なり。予若し領国を防御し、之を繁栄ならしむる時は領内のデウスの会堂、パードレ及びキリシタン等並に当地に来るポルトガル人一同も亦然るべし」と述べているように、戦国時における隣国の脅威を意識していたことは相違ないが、あたかも鉄砲が領内の支配を正当化する守護職確保の手段に利用されたのと同じ意図が、大砲にもあったことは否定できない。

このようにしてポルトガル人を通じて導入された大砲に対して、信長や秀吉も関心を示したのはいうまでもないが、当時の戦争はほとんど野戦であって、満足な道路が整備されていない状況からして、身軽に使用できる鉄砲ほどには普及しなかったのである。

〔Ⅱ〕秀吉の侵略野望

戦争目的のはっきりしない残酷非道な戦国時代、残忍と狂気の沙汰に代表される信長が、ポルトガルから伝来された鉄砲という新兵器によって旧来の騎馬隊に決定的な打撃をあたえ、戦国時代の戦術に大きな転換をあたえただけでなく、日本の近世歴史を大きく動かしたかのように評価するふしもある。しかしながら、彼の狂気と結びついた破壊と殺戮をくり返した報いは、毛利氏と対決の出陣を前にして、重臣の明智光秀の反逆にあい投宿の本能寺を急襲され、自刃を余儀なくされた。

猿面に赤ヒゲをはやした風采といい、貧乏百姓生まれの素性といい、その劣等感のかたまり

のような秀吉が、信長のような冷血な「将軍」に認知されるためには、筆舌につくせないほどの戦国武士的な功績を積んだことであろう。信長急死に接した秀吉は、諸戦において敵をせん滅するに機先を制する機動性を発揮して、宿願の天下統一を成し遂げた。

秀吉が信長に仕えて天下統一を成就する過程で、朝鮮をはじめとして、東アジア征服の野望を年代順に列挙すれば次の通りである。

(1) 侵略の野望

1577（天正5）年10月、信長が秀吉を中国（日本）方面の司令官に任命したときに、信長に対し「中国、九州の平定は物の数ではないが、次にその兵と九州の一年分の年貢を私にいただければ、兵糧、兵船をととのえ、朝鮮を攻めとりた」と、囁いている（堀正意の『朝鮮征代記』）。

1585（天正13）年7月、関白に就任した秀吉は、その歳の9月に、腹心の武将一柳末安（美濃大垣の城主）に明征服の抱負を述べながら、朝鮮ばかりでなく明国まで手にいれ、知行（領地）を増加してやるつもりであると、記している（「伊予・小松 一柳文書」）。

1586（天正14）年3月、秀吉はイエズス会宣教師ガスパール・キューラに明・朝鮮征服の意図を告げ、キューラは軍艦二隻と乗組員を提供を約束している（「イエズス会日本年報下」）。

1587（天正15）年、九州平定に先立ち、秀吉は毛利輝元や安国寺恵瓊・黒田孝高らに、九州平定の暁には朝鮮渡海・明征服を覚悟すべきことを指示している（「毛利家文書」）。

1587（天正15）年5月、島津氏が秀吉に服属した直後、秀吉は北政所に壹岐も対馬も自分に服従したこと、このうえは朝鮮国王に日本の内裏へ参洛するよう申しつけること、もし参洛し

なければ、来年成敗すること、自分の目の黒いうちに明国を手に入れるという野心を告げている（「豊臣秀吉書状」）。

1588（天正16）年、秀吉は島津義弘を通じて、日本全国は統一し、朝鮮も南蛮諸国も近々服属することを伝え、琉球の服属入貢を要求している（「島津家文書」）。

1590（天正18）年、秀吉は琉球の入貢を賞し、「異邦を以て四海一家を作す者也」と、秀吉のもとの天下はみな同胞であり、明征服のさいは、その先導に立つことを強く要求している（「琉球国王宛 関白秀吉書翰」）。

1591（天正19）年、島津氏は唐入り軍役1万5000人分の替わりとして、10ヶ月分の兵糧7000人分を、さらに名護屋城主伝普請のため鉄300斤献上を琉球国王に強要している。そして秀吉は琉球の兵を島津の与力とすることを認めている（「島津義久書状」）。

以上の如く、秀吉は日本国内の諸戦において、むかうところ敵なしの戦果を収めるたびに、朝鮮や明国、其他東南諸国への侵略野望を寸時も忘れていなかったことがわかる。

いよいよ秀吉の朝鮮侵略の実践段階に入る。1590（天正18）年11月、秀吉は天下統一の祝賀宴に朝鮮通信使の謁見である。この通信使はこの年の3月にソウルを出発、7月に京都に到着して大徳寺に宿泊し、小田原から凱旋する秀吉の帰京を待つという、実に8ヶ月ぶりのじれったい謁見であった。言うまでもなく通信使の目的は秀吉の日本国統一を祝賀することにあつたのであり、そのことは朝鮮国王が秀吉に宛てた次の国書に明かである。

朝鮮国王李^{あつ}昭、書を日本国王殿下に奉る、春候和煦、動静佳勝なり、遠く伝う、大王六十余州を一統すと、速やかに講信修睦し、以て隣好を敦くせんと欲すと雖も、恐らくは道路湮晦

(塞がる)にして使臣の行李淹滞の憂え有らん歟、是を以て多年思えども止む、今、貴价(御使、ここでは宗義智・景轍玄蘇ら)と与に黄允吉・金誠一・許箴の三使を遣わし、以て賀辞を致さしむ、今より以往、隣好、他の上に出ずれば幸甚なり、仍お不腆(人に物を贈る時の謙辞)の土宜、録して別幅に在り、庶幾わくは、笑留し余は順序珍簞(納める)せんことを⁽⁴⁾、

日本60余州統一の祝賀のため、国王の国書や管弦衆まで携えて来日した通信使に対する秀吉の傍若無人ぶりといい、宴席もろくに設けない冷遇ぶりといい、実に粗末なものであった。秀吉はこの通信使をなにを持って服属使節と思いこんだか、次のような朝鮮国王へ「証明嚮導」を命じるような辞意悖慢な書翰になっている。

「……………一超、大明国に直入し、吾朝の風俗の四百余州に易し、京都の政化を億万斯年に施すは、方寸(心)の中に在り、貴国先驅して入朝するは、遠き慮り有りて近き憂い無からん者乎、遠邦小島の海中に在る者、後より進む者は許容すべからざる也、予、大明に入る日、士率を將いて、軍營に臨まば、則ち弥よ隣盟を修むべき也、予の願は他に無し、只だ佳名を三国に顯さんのみ、」

柳成龍の「懲褫録」の記述の如く、「秀吉、容貌は矮陋、面色は黒にして、微かに覚われば目光閃閃として人を射るという、」その印象の描写は実に的をえている。しかも「便服にして、小児を抱き内より出で、堂中を徘徊す、之れを視るに乃ち秀吉也」と、そのおちよこちよな態度が彷彿とする。このような秀吉が「鉄砲」という凶器をもって、日本全国を制圧し、しかも長年にわたって侵略の野望を抱き、その宿願を吐露した国書まで受領した通信使が、秀吉の

黒い陰謀を見抜くことができなかったのは実に憤慨きわまりないことである。

正使黄允吉は、秀吉の目は燦々として恐るべき人物とみて、朝鮮に出兵するであろうと復命した。これに対して副使金誠一は、秀吉の目は鼠のようであり、恐るるに足りない、秀吉の出兵はない、と正副使が全く反対の報告をしている。ときの実権を掌握していた左議政柳成龍はなにを根據にしてか、あるいは党争の反映か、副使金誠一の復命を正しいとして、秀吉の侵略に対する防備を怠ってしまったのである。

(2) 朝鮮侵略戦争勃発

1592年4月、秀吉の命令一下、イエズス会宣教師のあつ旋によって購入した軍艦に合わせて国内で調達した船舶数百隻に、「鉄砲」という新兵器と刀剣・槍などで武装した16万余りの武士団を乗せて釜山港に侵入したのである。釜山沖はまさに黒い山がおし寄せてくるような無気味な状景であったであろう。このようにして、世にいう壬辰倭乱(文禄の役)がはじまったのである。

圧倒的にすぐれた新兵器の「鉄砲」で武装し、戦国時代にきたえられた侵略軍を相手に戦う朝鮮軍は大変不利であった。1592年4月13日未明、肥後宇土城主小西行長、対馬藩主宗義智らを中心とする武装団が釜山港東方の牛巖洞に上陸したことを皮切りに、わずか1年余りの間に朝鮮半島全域にわたって、侵略日本軍と祖国防衛のための朝鮮軍民との間にし烈な戦闘がくりひろげられた。(図2 第1次朝鮮侵略関係全体図参照)⁽⁴⁾。

(4) 北島万次『豊臣秀吉の朝鮮侵略』、1995年

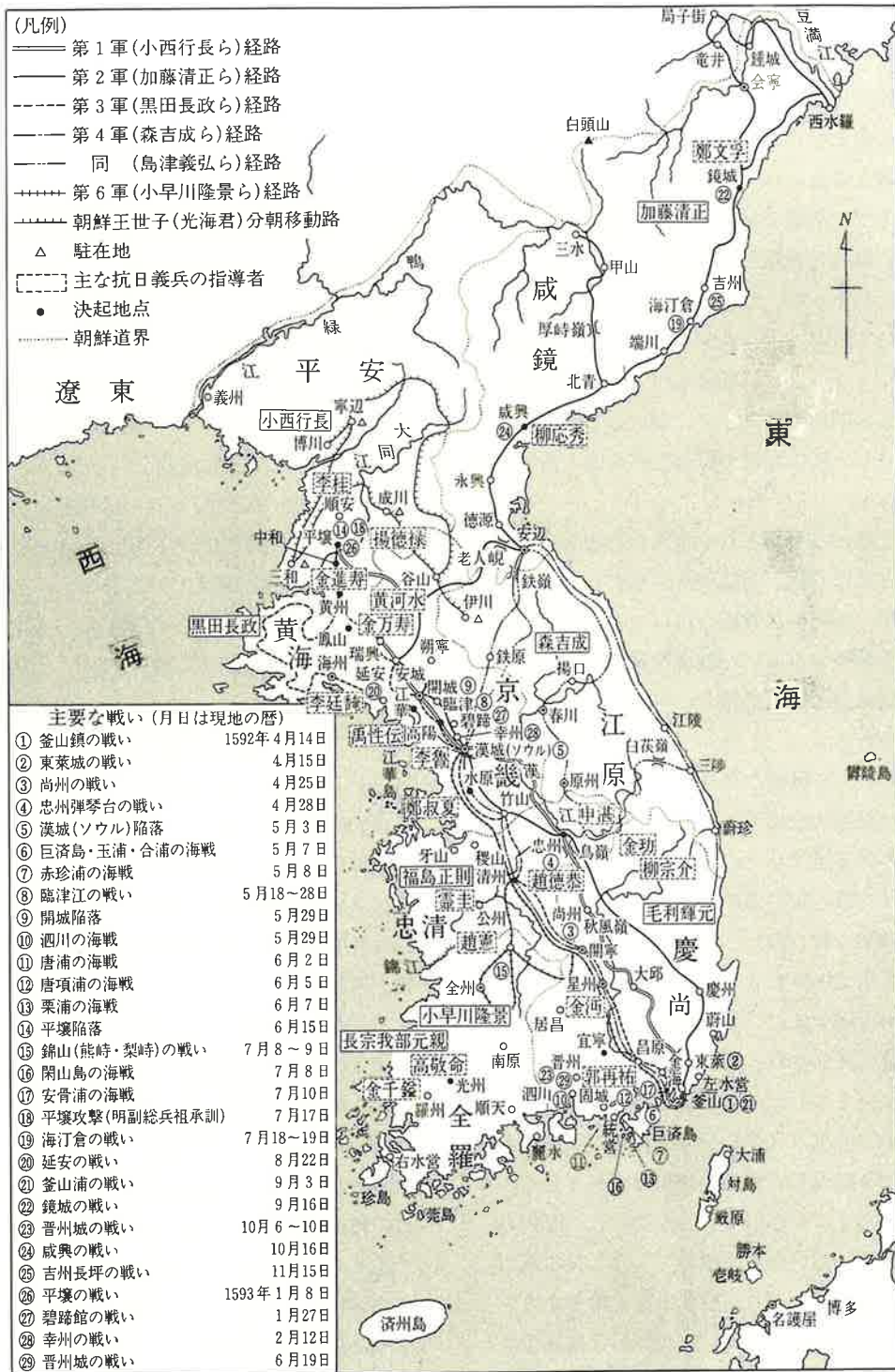


図2 第1次朝鮮侵略関係全体図

(3) 祖国防衛戦展開

1592年の春から夏にかけて3か月足らずのうち、朝鮮のほとんどの地域が日本軍に席捲され、殺りくと放火などのあらぬかぎりの暴虐非道ぶりに憤然と立ち上がった朝鮮民衆は、侵略者の占領地内で、祖国の荣誉と民族の尊厳を守るため、自ら義兵を組織して勇敢にたたかった。一方李舜臣將軍の率いる朝鮮水軍は、南海の全海域において日本の水軍を撃破して、その補給路を断った。このように朝鮮水軍と義兵・官軍との緊密な合同作戦によって、戦局は大きく転換をもたらし、遂に秀吉の野望を打ち砕く結果となった。

祖国を救った英雄として讃えられる李舜臣將軍は、ときに47歳、壬辰倭乱が始まるや、亀甲船を駆使した巧みな戦術を用いて、随所に日本の水軍を撃破するという戦果を収めているが、李舜臣將軍指揮の下活躍した亀甲船の船蹟は次の通りである。

朝鮮において戦船が発達したのは、倭寇の絶え間ない横暴出没に手を焼き、必然的に海戦をくりひろげる戦法をとらざるをえなかった。倭寇の特技的戦法である斬り込み戦術に対抗するために考案されたのが、蓋板で覆った防備的な高麗式戈船であった。李朝の宣祖王代に日本の侵攻説が台頭するにつれ、李舜臣が全羅左道水軍節道使に任命され、1591（宣祖24）年2月に全羅左水営となった。彼は日本侵攻に備えて、部下の軍官の1人に造船技術に優れた才能をもつ羅大用を起用して戦船の建造にあたらせた。倭寇の戦術をよく心得ていた李舜臣と、歴代の戦船に通達していた羅大用の2人は、日本軍の斬り込み戦術すなわち攻撃的戦法を撃破するのに適した戦船は、太宗代（1415年）に倭寇撃退用に造られた亀船が最も優れているという結論に達した。

亀船の構造は、だいたい次のようである。亀船の大きさは、長さ27～28m、最大幅8～9m、深さ（底板から甲板まで）2.3m、深さ（底板から蓋板頂部まで）6.06m、吃水0.94mであり、櫓20個、砲穴74個、くぐり門（ハッチ）28個である。船は上部が蓋板（亀甲板）で覆われているが、幅1尺5寸の通路をつくって桅（檣柱）を横にしたり立てたりするのに便利になっている。船首には亀頭をとりつけ、硫黄や焰硝を燃やしてその中から吐きだして、敵を混乱させた。船室は二層になっていて、現代船舶の双甲板船と同じである。下層は24間からなるが、五間は金物と武器庫で19間は軍兵の休息室であり、上層には船将（指揮官）と将校の室があり、火砲などの攻撃装置が備えつけてある。

李舜臣と羅大用が造った亀船は、太宗代の亀船とほぼ同じであるが、図3の如く、亀頭の下にさらに鬼頭をとりつけ、蓋板に亀紋を描き、そこに左右各二か所、すなわち四か所に門がつけている。亀頭の下には大門と砲穴二個があり、舷板の左右にはさらに各1個の砲穴と碇がある。舷欄の左右に各々10個の砲穴があり、蓋板の左右にも各々六個あるから砲穴は合計36個になる。櫓は左右8個ずつ合計16個ある（「李忠武公全書」図説）。

壬辰倭乱が勃発した1592年の6月、李舜臣が宣祖王に出した報告書によると、統制営亀船を改良して二種の亀船をつくった。その一つは、李舜臣が全羅左水営に水使として着任してまもなく造った、いわゆる全羅左水営亀船である。この亀船は特に、火攻に備えて城門を薄い鉄板で覆うのと同じように、蓋板を薄い鉄板で覆って亀甲紋の六角形の形に釘をうっている。秀吉が朝鮮侵略の翌年の2月、亀船を模倣して蓋板の鉄板を戦船に被せるため、日本全国に鉄板を差し出せとの指示を出している。1592年に行な

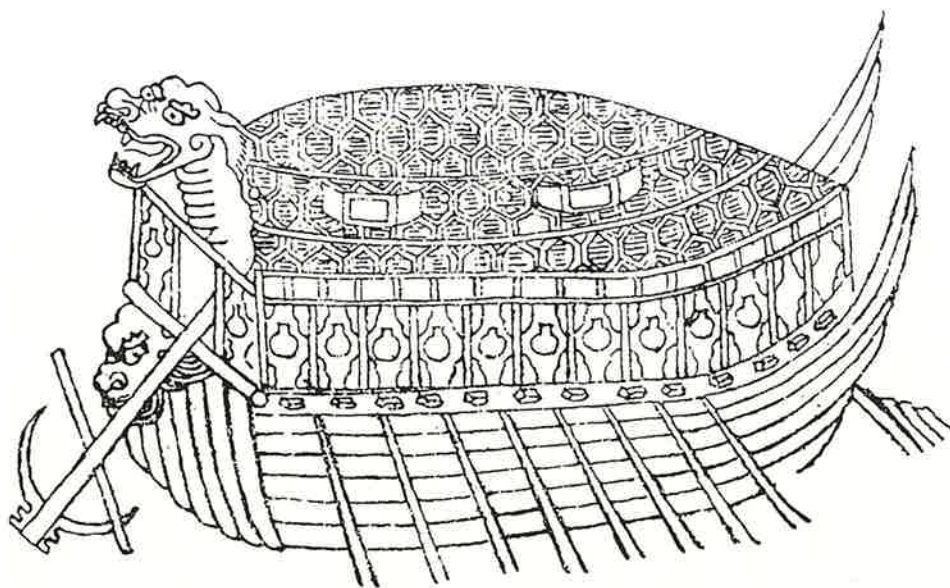


図3 全羅左水營龜船図 『李忠武公全書』より。

われた数回の海戦で、朝鮮側の鉄甲船の威力に驚いた日本軍が、それに対抗するための鉄甲船をつくろうとした試みがあった。しかし、渡辺世祐は「朝鮮役と我が造船の発達」というタイトルで、『史学雑誌』（1935年）に、あたかも日本が世界ではじめて鉄甲船をつくったと主張している⁽⁵⁾。

〔Ⅲ〕侵略戦争の爪あと

二度にわたる秀吉の侵略によって、戦場になった朝鮮半島がいかに悲惨な状況におかれたか、言語に絶するものである。

日本軍の残虐非道な行為は、侵略開始その日から始まっている。釜山城侵攻場面を記した『吉野甚五左衛門覚書』によれば、この時の「きり首三万」となっており、「女といわず、男といわず、手を合わせてひざまずき『助けてく

れ』『止めてくれ』と頼みこむのを非戦闘員であろうが、犬猫であろうが、手当たり次第に殺

表1 鍋島直茂・勝茂軍鼻・耳・首討取一覧表

年 月	場 所	数 (鼻・耳・首)	備 考
1592 (文禄元)年6月	咸鏡道安平城	600	「斬 首」
1593 (文禄2)年10月	〃 永岡山	1,500	「獲 首」
1593 (文禄2)年	咸興之北80里	1,300	「斬 首」 「悉敵耳送日本」
〃	吉 州	3,000	「獲 首」
1597 (慶長2)年2月	不 明	700	「斬 首」 ※(勝茂軍)
1597 (慶長2)年	全羅道 (全溝・全堤)	3,369	「呢之送日本」 ※(勝茂之力戰驚衆目)
—	—	合計 10,469	—

※出典『加藤家伝清正公行状』

(5)全相運『韓国科学技術史』、高麗書林、1978年

表2 吉川家鼻請取(状)一覧表(吉川家文書)より

年月日	数(鼻)	請取人(目付) (確認者)	鼻差出人	備考(請取状 記事)
1597年 (慶長2年) 9月1日 不明	480 13,127	早川主馬頭 長政(花押)	吉川蔵人	鼻数 18,350 この内5,223山内殿一手衆 ※差引 13,127となる。
9月4日	792	早川主馬頭 長政(花押)	"	
9月7日	358	"	"	
9月9日	641	"	"	
9月11日	437	"	"	
9月17日	1,245	"	"	
9月21日	870	熊谷内蔵允(花押) 垣見和泉守(〃) 早川主馬頭(長政)	"	於珍原郡請取頭之鼻数之事。
9月26日	10,040	"	"	貴礼拝見本望之至候所而 而珍原。靈光於両郡ニさ るゝ御成敗之鼻数、合登 萬四拾、慥ニ請受申候也 恐々謹言。
10月9日	3,487	熊谷内蔵允 (花押)	"	請取頭之鼻数之事合参千 四百八拾也右、慥請取申 所也。 慶長貳、10月9日吉川蔵 人殿御陣所熊谷内蔵允 (花押)。
	31,477 (合計)			

表4 加藤(清正)軍鼻・首「討取」一覧表

年月日	場所	数(鼻・首)	備考(出典及び 記事)
1592(文禄元)年	釜山浦より おく13里 (けく志う) (慶州)	1,150	
4月		(1,147)	秀吉の感状(御朱印) (天正廿<壬辰>年3月 ともあり)
7月26日		737	おらんかい人討取
9月12日		231 (230)	
		973 (797)	"
1593(文禄2)年	(吉州?)	3,020	(首)
2月		(3,027)	(首)(一揆之奴原)※義兵と 思われる。
3月	伝奏館	390	秀吉の感状(『清正公行状』)
3月晦日	間城山	(3,427)	
6月28日		(932)	
12月	安康	(2,000)	撫切
1597(慶長2)年	黄石山	(177)	
7月	南原城	(86)	
9月14日	全義館	73	討取
		(30)	
12月22日	蔚山	389	(打取)
12月27日	蔚山	(129)	
		720 (425)	
158(慶長2)年		2,370	秀吉の感状(正月22日)
1月4日	蔚山	(2,330)	
9月16日	蔚山	(386)	
9月16日	蔚山	1,500	
		(1,163)	(打取)

※出典は『清正記』、『加藤家伝清正公行状』。()内の数字
は『清正公行状』より

表3 島津家・鼻・耳(首)斬取一覧表

年月日	場所	軍(個人)	個数 鼻・耳(首)	記載資料	備考
1592 (文禄元)年 12月	全化	久保主 (島津又一郎) 久保主(他)	(29)首 (3)首	征韓録	
1592初冬	(江原道) 春川	又七郎忠盛	(鼻・左の耳) 70余	"	
8月	南原	義久	421	面高連長坊	
1597(慶2)年 8月25日	全州	"	2	薩摩旧記	
9月8日	韓山	義弘	250	"	
9月11日	龍安	"	61	"	
9月25~ 10月10日	海安	忠恒	「斬殺すること 頗る多し」	"	
	海南	(〃)	53	測辺量右衛 門覚書	
10月2日	海南	義弘	「討捕の鼻数餘 多参候」	面高連長防 高麗日記	
10月3日	"	"	「鼻も数多候」	"	鹿児島方 10,946
10月9日	"	"	「さるみ数十人」	"	枯佐方 9,576
10月21日	淳昌	"	「さるみ討取数 十人」	"	浜市方 7,672
10月23日	全州	"	1	"	伊集院方 6,222
1998年10 月1日	泗川	義弘、家久	38,717	島津家譜	北郷作 左門 4,300

している」となっている。

第1次朝鮮侵略関係全体図(壬辰倭乱)にその主要な戦いを列記しているが、これらの戦いおよび侵略軍の向う所いたところで、上述のような残虐行為がなされたであろうことは想像にかたくない。以下主要な大量虐殺の模様だけを記す。

以上の表(1、2、3、4)⁽⁶⁾だけをみても、第一次侵略(壬辰倭乱)、第二次侵略(丁酉倭乱)に関係なく、耳取り・鼻切り、殺しつくす、それこそ侵略者の姿むき出しであった。

加藤清正の家臣山本安政は、自分の戦功を、「男女生子迄も残らず撫切に致し、鼻をそぎ其日々に塩に致し」と、覚書に記録している。そのようにしておくられてきた耳や鼻を埋めたのが、京都の豊国神社前に遺る「耳塚」である。

その他、陶工の強制連行や、「高麗磁器」な

どの略奪については省略するが、これらの文化遺産略奪の問題は今日もなお尾を引いている。

おわりに

1543年ポルトガル船が日本の種子島に漂着して鉄砲を伝えたのは全くの偶然の出来事であった。この1543年という年は、奇しくも、西洋世界では、画期的な科学大著書、コペルニクスの『天球の回転について』と、ヴェサリウスの『人体の構造について』とが著はれた年である。またこの時期にポルトガル人やスペイン人などは中国やフィリピンに進出して「南蛮貿易」が行われるとともに、宣教師もキリスト教布教のため渡来していたのである。だから、ポルトガル船が日本という島国に暴風雨にあい、漂着するという事件は充分ありうることも考えられることである。

ところが、ポルトガル船による鉄砲伝来は、日本が西欧科学技術との最初の接触となり、鉄砲という最新の武器が戦国時代に入ってきて国内にたちまち普及して大きな威力を発揮するようになり、その影響力がアジア隣国にもはかり知れない惨禍をもたらしたことである。

この鉄砲伝来は今をさること450年余りの昔のことであるが、鉄砲制作という模倣「技術」を西欧から学んだことである。それから下って明治期に入ると、西欧文明を代表する科学技術を受容する体制を確立していくが、鉄砲製作技術のような単純なものではなく、19世紀半ばの西洋科学技術となると、どうしても、科学の基礎から科学精神を学び、そこから応用までと発展させていかなければならなかった。終局的には、鉄砲という武器を製作する技術修得の如く、

日本の科学技術が、軍事産業偏重の技術中心主義へ流れてしまったところに注目したい。

そして、鉄砲を製作する技術が日本国内に普及していくのと相俟って、ポルトガルの宣教師に軍艦購入を依頼して、朝鮮をはじめアジア侵略の野望をもくろんだ秀吉と、明治期における軍国主義者たちが、イギリスのジャーディン・マセソン商会と軍艦をはじめ大砲などの武器取引をしながら、朝鮮をはじめアジア侵略の準備を寸時も怠らず、推進していったことは全く軌を一つにするものである。

鉄砲という新兵器の威力をかりて日本国内を統一した秀吉が、理不尽な言いがかりをつけて、日本国内統一となんら異なることなく、征服支配というごう慢な蛮行は、明治期の日本指導層のアジア政策にそのまま現れている。壬辰倭乱のとき、朝鮮に侵略した秀吉軍が、朝鮮民族に対し日本的風俗を強制し、いわば朝鮮の日本化を進めていったことはよく知られている。安国寺恵瓊⁽⁷⁾が朝鮮の子供を集め、「いろは」を教えたり、髪形を日本風に改めたり、捕虜に対しては、強制的に日本の名前に改姓させたりしたことは、日本帝国主義者たちが朝鮮を植民地化政策としてとった同化政策と、不思議なくらい一致している。

約450年前、種子島にたった一隻のポルトガル船の漂着という偶然事から、西欧科学技術との接触がはじまった。鉄砲伝来をもたらしたその船が漂着した門倉岬まで直線距離にして約8キロの手の届きそうな距離の浜辺に、いみじくもいま日本唯一、最大のロケット発射台が設置されて、宇宙観測のための静止衛星を打ち上げる実験を行なっている。

16世紀半ばの鉄砲という新兵器づくりに、当

(6) 琴乗洞『耳塚』総和社、1994年

(7) 小和田哲男『豊臣秀吉』中公新書、1987年

時の技術者刀鍛冶たちが、南蛮渡来の最新技術を自らのものにしようとして、切磋琢磨し大量生産にふみきった。その鉄砲のもたらした功罪についてはすでに述べた通りであるが、今日東大をはじめとする宇宙開発団などが、純国産大型ロケットH2の打ち上げのため、莫大な費用と時間をかけて“宇宙新時代”へ挑戦している。まことに結構なことであるが、このようなロケット技術が、昔日の鉄砲のような過ちを犯すこと

なく、良質（非軍事的）なロケット技術として発展することを希望したい。

おわりに、「日本の鉄砲伝来」という日本科学技術史の一側面を管見しながら思うことは、現代においても秀吉的な人物像が単なる一個人的な問題でないという日本的風土に深い憂慮を抱きつつ、来たる21世紀に向けてアジアは力による支配被支配的な関係でない根本的な変革がもたらされることを切望してやまない。